

印刷業界で一目置かれる 「環境配慮」へのこだわりと 先進性

佐川印刷

「環境基本理念」に忠実に

2020年に創業50周年という大きな節目を迎える佐川印刷。

これまでも同社は「環境に配慮した事業」を旗印に、先進的な技術や考え方を貪欲なまでに取り入れ、そして有言実行を貫いて来た。そして、冒頭で掲げた「創業50周年」に向けて、このポリシーをさらに加速させていくと言う。今回はその佐川印刷が取り組む「環境配慮」の最前線に迫ってみる。

まずは、同社が掲げる「環境方針」に注目したい。まさに「地球に優しい」を実践する上での「憲法」とも呼ぶべきもので、こだわりがいかなるものかは、この7項目を読めば一目瞭然だろう。

●全社員が環境に配慮したものでづくりと環境にやさしい行動を実践する。

●全社員が一丸となって環境保全活動、環境汚染の予防に取り組み、法規制を含む当社に与えられた要求事項を順守することによって、地域社会の発展と住み良い街づくりに貢献する。

●当社の生産活動で発生する有害

な廃棄物の排出を抑制し、適正な処理を行って、生活環境の保全及び公衆衛生の向上を図る。

●循環型社会の形成を目指して、リデュース（抑制）、リユース（再使用）、リサイクル（再生）を推進する。

●紙、ゴミ、電気のみならず、当社の営業、生産活動を通じて発生するインプット、アウトプットに目を向け、有害であるものは監視改善し、有益なものは推進拡大を図る。

●当社が製造、販売する製品・サービスにも環境をあてはめ、製品の設計、製造において製品ライフサイクルを考慮する。

●これらの方針を達成するためのマネジメントシステムを構築し、実施し、検証することによって、より良い環境づくりのための継続的改善を行う。

この「環境方針」のキモは、「住み良い街づくりに貢献」「循環型社会への貢献」「有益なものは推進拡大」「継続的改善」であろう。

単に「環境保全にこれだけ積極的に取り組んでいる」というような、自己満足に陥ることを暗に戒め、地

元や地域、消費者の側の目線に立ち、「何が有益なのか」を持続的に考えるを強調している点が読み取れるだろう。

印刷業界広しと言えども、「環境配慮」に対し、これだけ具体的かつ積極的な文言を盛り込んだ行動方針を掲げる企業は、そう多くはないはずだ。

「川上」の森林保護にまで

では、佐川印刷が推進する環境配慮とはいかなるものか。具体的にその中身を俯瞰して見よう。

まずは、「FSC®認証」。これは同社とその関連会社であるジャパンニューペーパーがすでに取得しているものである。ではこの「FSC®認証」とは何か。平たく言えば、地球環境に配慮し、持続可能な森林管理を行なっている森林から伐採

された木材を原材料に使用している、ということ。

そして、森林管理（FM）の認証を受けるには、次に掲げる「10原則」を総てクリアした森林でなければならぬ。

1 森林管理や取引に関する国内法や国際条約の順守

2 労働者の権利や安全の確保

3 先住民の権利の不可侵

4 地域社会との連携

5 森林の多面的な機能への考慮

6 環境への影響の評価と環境維持

7 整然としたデータ・情報に基づく計画作成

8 環境や社会への影響のモニタリングと負の影響の抑制

9 森林の生態的、社会的に高い保護価値の保全

10 管理活動に関する計画の遵守

これを見ても分かるように、ハード

ルはかなり高い。

そして、このFM認証のお墨付きを得た森林由来の木材・紙製品を適切に管理・加工している証（あかし）が、「FSC®認証」となる。

この認証では、特にサプライチェーンの部分に厳しいチェックが入る。購入・製造・保管・販売の各工程で、

COC認証のない企業・組織が一度でも介在した場合、その製品は認証製品Ⅱ「責任ある森林管理マーク（FSCマーク）」をつけて取引することは許されない。

さて、この認証を取得した佐川印刷は、FSCマークのついた紙類の使用を、クライアントに積極的に勧めているのである。

太陽エネルギーも積極活用

佐川印刷は再生可能エネルギーについても熱心だ。同社の主力工場である日野工場（滋賀県日野町）で2014年4月、大規模太陽光発電システム「佐川印刷メガソーラー発電所」を構築。約5億5000万円を投じて、シャープ製の多結晶型太陽光パネル1万52枚を、同工場の製本工場やオフリン（オフセット輪転機）第1工場、同第2工場、紙倉庫の各屋根にパネルを設置した。

その面積は約1万6500㎡、発電容量は約2000kwで年間発電量は約238万kWhを誇る。

国が進める再生可能エネルギー計画にも応じたもので、ここで得られた電力は、フィードインタリフ（固定価格買い取り制度）を利用して全量関

西電力に売却（20年契約）している。間接的ながら電力会社の発電所で使用される化石燃料を減らす効果を意識したものである。

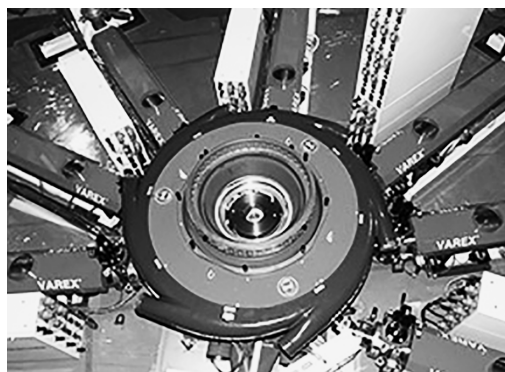
また、太陽光パネルは思わぬ副産物も生んでいる。印刷工程では大量の熱が発生するため、空調にかかるコストもバカにならない。

しかし、工場建屋の屋根に太陽光パネルを仕置き詰めることで、日中の日差しを遮蔽する効果が期待でき、結果的に空調コストの削減にも成功している。

この他、日野工場を中心に既存の照明をできるだけLEDに交換する



日野工場内に構築された「メガソーラー発電所」



国内でも数台しかないW&H社製フィルム生成設備

ことで、光熱費削減と環境負荷の低減にも挑んでいる。

人に優しいインキの積極活用

佐川印刷の環境配慮への取り組みはこれだけに留まらない。例えば「無溶剤水性インキ」の積極活用だ。

同社はスオ率45周年に当たる2015年に、「フィルム印刷」という新境地への進出に踏み出している。軟包材（フレキシブル・パッケージ）市場への挑戦で、飲食品包装やトイレタリー用品、化粧品などに多用され、今後も成長が期待できる分野と確信したからである。

ただし、ここでも「環境配慮」の求

リシーを頑なまでに貫く。無溶剤水性インキを使用した高速フレキシソ印刷機導入へのこだわりだ。

実は、国内の軟包材印刷では、溶剤グラビア印刷が大半を占めている。実際、同社が水性フレキシソ印刷機を導入した2015年当時、同印刷機を扱う印刷会社は10社程度だったという。

ちなみに「溶剤」とは、トルエンなど芳香族化合物を含まない、高沸点石油系有機溶剤が主流。

人体への影響や環境負荷に関して、一定の配慮がなされてはいるものの、やはり化石燃料由来であり、「持続可能社会」を考える上では疑問が残る。また人体に優しいとも言いがたい。

一方、有機溶剤を使用しない水溶性インキのフレキシソ印刷の場合、肌に直接接触する飲食用軟包材に使われる例が増えており、現にサントリーの「天然水」やコカ・コーラの「いろはす」のパッケージや、マムドナルドのカップなどに使用され始めている。ただし、水溶性インキは濃度が低く、フィルムとの相性が悪いため、技術的に難しいというハンディを抱える。しかし、単に飲食品の成分ばかりでなく、これらを納める包装材にまで「安心・



環境配慮型のノンソルベルト・ラミネータ

安全」を求めつつある消費者のニーズをいち早くキャッチし、機敏に対応しようとする同社の積極姿勢は、業界でも注目を集めている。

また、同社はフィルム製造にインフレーション式フィルム生成機を2台導入するが、内1台は国内でも導入例が数台ほどというハイテクで、後記内バリアフィルムが製造可能なフル装備の七層機である。

最先端技術の積極導入は、同社のいわば「十八番」だが、注目はここで作られるフィルムの張り合わせにも、「人体に優しい」こだわっている点だ。



無溶剤水性インキを使うC型水性フレキシソ印刷機

前述した軟包材などに使われるフィルムは、薄いフィルムを何層も張り合わせ、ラミネート状にして製造されるのだが、この時接着材となる糊にも、無溶剤のものを使用する。これは「ノンソルベント・ラミネータ」と呼ばれ、同様に「人体に安心・安全な素材」として注目を集めている。

このように、「環境配慮」にことごとこだわる「地球に優しい印刷会社」・佐川印刷。「創業50周年」の2020年を目前に控え、今後どのような策を講じて行けるのだろうか。その一挙手一投足に目が離せない。